支援態勢づくり本腰

支えよう！在宅の重症児

☆下★

医療ケアが必要な在宅の重症児への支援を充実させていくために、医学系の大学も本腰を入れている。心ある医療者の育成を目指す名古屋大、地域のネットワークづくりの中核となっている三重大の取り組みを紹介する。（編集委員・安藤明夫）

大学の取り組み

名古屋大 実習通し医療者育成
三重大 地域の力掘り起こす

愛知県春日井市にある県心身障害者コロニー中央病院。外来の診察室で、車いすの原優華さん（二）＝岐阜県多治見市＝は、集まった医学生たちをキョロキョロと見渡した。

一三四一グラムの低体重で生まれ、脳性まひによる身体障害、知的障害がある。幼いころから誤嚥性肺炎を繰り返し、唾液が気管に入らないように特殊なチューブを挿入する手術を受けた。

「前は、十五分に一回のたん吸引が必要で、通院のときも途中で車を止めてやっていました。今は一時間に一度ぐらいで、本当に助かってます」

苦労をさりげなく話す母親の美奈さん（三六）に、医学生たちは自然と頭が下がる。名大医学部の五、六年生を対象にした病院実習のひとこまだ。

愛知県地域医療再生計画の事業として、名大大学院に「障害児（者）医療学寄付講座」が昨年設けられた。重症心身障害児の医療に携わる医療者を増やしていくことが目的。就任した三浦清邦教授の発案で、同コロニーでの実習が始まった。

親へのインタビューのほか、小児外科の外来や病棟、同コロニー内の重症心身障害児施設・こばと学園の見学、勤務医との懇談も。「こういう世界もあると知ってほしい。将来、医療の現場で重症の子と出会ったときに〝分からん〟と敬遠せず、優しく接することができる医師になってくれたら」と三浦教授。

参加した医学生たちは「大変な中にも成長を感じ取り、深い愛情を注いでいる姿に感激した」「家族支援あっての在宅介護だと実感した」「胃ろうに否定的なイメージを持っていたが、成長するために必要だと分かり価値観が変わった」と話した。

脳性まひの優華さんと接する名古屋大の医学生たち。左は三浦清邦教授＝愛知県春日井市の県心身障害者コロニー中央病院で

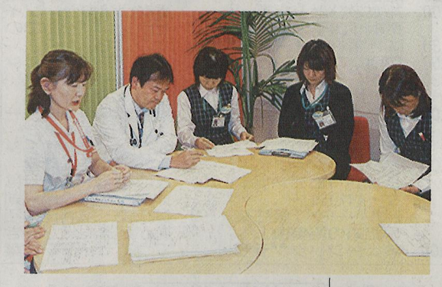
◇

三重大は一月、付属病院内に「小児在宅医療支援部」を設立した。小児科の岩本彰太郎医師、小児看護専門看護師の河俣あゆみさんらが中心となり、在宅支援の充実に取り組んでいる。

在宅医療を必要とする子どもは県内で推定約百人。しかし、県内の小児科と在宅支援を掲げる診療所計五百二十カ所のうち、呼吸管理などの医療ケアが必要な子どもの診察に対応しているのは四十六カ所。訪問診療まで手掛けるのは、二十一カ所にとどまる。

訪問看護ステーションの訪問看護師百二十一人へのアンケート（二〇一〇年）でも、小児訪問看護の経験がある人は。26％の三十二人。呼吸器管理の不慣れなどが足かせになっていた。状況の改善のため、岩本さんらは各地で講習会を開催している。

また、医療的ケアを必要とする子が、新生児集中治療室（NICU）などを退院する際に、地域で訪問型の診療、看護、リハビリができる態勢を目指す。



院内の検討会で、子どもたちへの支援を話し合う（左から）河俣さん、岩本医師ら＝津市の三重大病院で

充実のかぎは病診連携

四月に福岡市で行われた日本小児科学会でも、在宅医療の現状についてさまざまな発表があった。

群馬大の吉野浩之准教授（障害児教育学）は、アンケートを基に、二十四時間対応の訪問看護ステーションが増え、小児にも関わるようになったと報告。一方、医師による訪問診療は限られており、「在宅医が小児科医である必要はなく、病院の小児科医が在宅医としっかり連携していくことが必要」と訴えた。

日本初の小児在宅医療専門クリニック「あおぞら診療所墨田」（東京都）の前田浩利医師は、在宅医療が子どもたちの成長する力を引き出し、家族の安定にもつながると強調。また、緩和ケアにも積極的に取り組み、これまでに十四人をみとったことを報告した。

宇都宮市で重症児の一時預かり施設を運営する高橋昭彦医師は、利用実績が安定しないなど経営上の課題を報告し、行政の施策の必要性を訴えた。

医療取材班▶iryouhan@chunichi.co.jp

医療に関する過去の記事は「中日メディカルサイト」で閲覧できます

ホンネ外来

待ちに待った初めての妊娠で、地元病院を受診しました。毎回、予約しても二時間以上、待つのは当たり前。診察では、質問しても素っ気ない返事でした。花粉症がつらく、妊娠中でも服用可の薬を処方してもらって調剤薬局に行くと、薬剤師さんがけげんな顔で「血圧高いですか？」と。間違って血圧を下げる薬が処方されていたそうです。次は、妊婦は飲まないほうがいいとされている種類の薬が誤って処方され、これ

「ホンネ外来」は患者きに、医療への思いを語1（住所不要）中日新聞2（221）1669、〒住所、名前、年齢、くださいい。中日新聞医療